

モンスター娘に襲われる A S M R ～クイーンラミアのイライザ編～

(Attacked by a Monster Girl ASMR - Queen Lamia Girl Eliza Version -)

あらすじ：

冒険者が訪れる大樹海。その生態系の中には多くの魔物が存在する。魔物の中には、人間の作りだしたものを好んで奪う存在もいるという。ラミアの女王であるイライザは、樹海を統べる『魔王』の一人でありながら、人間の持っている酒が大好物。酒売りの少年を見つけると、すぐさま自分の巣に持ち帰り、飲みながらの性交を開始する。媚薬効果を持っている酒によって、性交を重ねるごとに激しさを増していく。最終的に、少年はイライザの給仕となるか、酒のつまみとして丸呑みされるかを選ばされるのだった。

登場キャラクター：

クイーンラミアのイライザ：

酒好きなラミア。樹海に何名かいる『魔王』の肩書を持っている。人間の作った酒が好物であり、自らもさまざまな効能のある魔法の酒を醸造しては、自分で楽しんだり、やってきた冒険者に実験がてら飲ませたりしている。不老不死の酒を醸造したことで、長生きして『魔王』の座に収まったが、そのせいで昔からの仲間が死んでしまい、今は樹海の奥でひっそりと暮らしている。酒を飲むとセックスがさらに激しくなる一方、いきなり泣き出すなど、本来はさびしがりやで情緒不安定に。酒豪にして性豪。

少年冒険者：

ワイン工房に奉公する少年。もともとは樹海の入りで、冒険者たちにワインやウイスキーを売っていたが、樹海で魔物に襲われたところをイライザに保護（あるいは拉致）されてしまう。醸造所で奉公しているため、全身から酒の匂いを漂わせている。また酒の製法にも詳しいため、イライザにとってはお気に入り。

(※制作都合上、一部内容を変更した箇所があります)

1. 出会い ～ワインを狙う魔王～

イライザ「ふん……ふん、ふん……ふむふむ……」

イライザ「ふう～む……ふしゅ……しゅるるる……」

イライザ「うう～ん……かぐわしい香りじゃの……♪」

イライザ「ふうむ、酒精のいい香りじゃあ……これは……葡萄酒かのう？ おぬしからも、酒の芳香がただよってきておるぞ……」

イライザ「なんともたまらぬ匂いじゃのう……ふしゅるるる……」

イライザ「ふふふ……なんとも驚いた顔をしておるのう。わらわはイライザという。樹海のラミアの女王などと呼ばれてもおるが……なに、ただの酒好きのラミアじゃ」

イライザ「ふふふ、とぼけた顔をしておるのう。なにがあったか覚えておらぬか？」

イライザ「酒の匂いにつられて樹海を歩いておったら、酒売りのお主がちょうど魔物に襲われておってのう」

イライザ「魔物はわらわが追い払ったが、お主はそのまま気絶してしまったのじゃよ」

イライザ「気絶したとはいえ、酒の匂いをぷんぷんさせてわらわを誘惑するものじゃから……ついつい拐(かどわ)かしてしもうたわ」

イライザ「おおっと、逃げるなど考えるなよ？ ここはわらわの居城であるし、お主の足ではわらわから逃れられぬ。絶対にな」

イライザ「なあに、怖いことはせぬよ。そう怯えるでない。しばらくわらわの酒に付き合ってくれば、それでよいのじゃ」

イライザ「ひとまずは……お主の抱えておる樽から、一杯売ってもらおうかの♪ ほれ、ほれ、わらわのこの、お気に入りの杯に注ぐのじゃ♪」

イライザ「おおっとっと……ふひひ、若い少年に酌をさせるのは、いくつになってもたまらぬのう♪」

イライザ「どれ、一献……んっ、んぐっ、んん……ぷはあああ～～♪」

イライザ「おおっ、なかなかの味じゃ♪ よい酒を造るのう。うむうむ、気に入ったぞ、少年よ。お主のおかげで、わらわの喉も潤ってくるわ」

イライザ「うむ、うむ。決めたぞ？ お主の持つ樽が空になるまで、この廃城にいてもらうとしよう。なに、ここはわらわだけじゃ、他の魔物が入ってこぬよ」

イライザ「あああ……それとな？ わらわは酒に酔うと、どうにも淫蕩になってしまうのじゃ。体の火照りが収まらなくてのう……」

イライザ「まあ、お主を連れてきたのは、酒だけでなくちんぽも目当てなのじゃから……ふふふ、別に構うまいな？」

イライザ「ラミアの身体でたっぷり気持ちよくしてやるゆえ……お主もがんばって、ちんぽでわらわの酔いを醒ましておくれよ？ ふふ、ふふふふ♪」

2. 耳舐め ～舌を伸ばして逆耳舐め～

イライザ「んんっ……んっ……ごくっ……ごくっ……ぷっはああ～」

イライザ「んん～、美味しい酒じゃの。いくらでも飲めそうじゃ♪」

イライザ「わらわはとにかく酒が好きでう……樹海ではなかなか手に入らぬゆえ、自分でも醸造しておるのじゃが――」

イライザ「やはり人間が作る酒が一番うまい。ふひひ、酒精を求める人間の欲望はとどまるところを知らぬのう……」

イライザ「まあ……ごくっ……それはわらわも同じであるが……」

イライザ「ふうう～……体が熱くなってきたわ。一度こうなってしまうと、性交でしか収まらぬから、覚悟しておけよ……」

イライザ「とはいえ、お主はまだその気にはなっておらぬようじゃのう。かわいそうに、ちんぽが縮こまっておるなあ♪」

イライザ「任せよ、長生きしたラミアの熟練の舌技で、すぐにその気にさせてやるからのう……ふしゅるるる」

イライザ「おやおや、可愛い耳じゃの……ふふふ♪」

イライザ「今からお主の耳を、わらわのながあい舌でなめとって、お主のちんぽをいきり立たせてやるからのう。覚悟して味わうんじゃぞお？」

イライザ「それでは早速……んああああえ……れろおお……んんあはああっ……」

イライザ「じゅるう……れろお、じゅぶっ、あむっ、んんっ、じゅぶう……ふふふ、ちょっとしょっぱいのう。やはり酒のつまみに丁度よいわ……じゅぶう、れろお……」

イライザ「ラミアの舌は長いからのう。隅々まで丁寧に、ねぶりつくしてやるぞ……じゅぶう、れろお……じゅる、れる、れ～ろおおお……♪」

イライザ「ほうれ……穴の奥まで、じゅぶっ、じゅるるう、ラミアの舌が入っていくぞ～？ 気持ちよいか？ じゅぶぶ、れろお、じゅぶ、れ～るうう♪」

イライザ「ふひひひ♪ 顔が真っ赤になっておるのお。こんな年若い男に喜んでもらえるのなら、わらわもまだまだ捨てたものではないようじゃな」

イライザ「んんぶっ、じゅぶ……れるっ、じゅるるる……れろろお、んあっ、はあっ……あぶっ、じゅぶ……じゅる……」

イライザ「じゅるる……じゅぶっ、んはあっ………じゅぶ……ちゅっ、あむっ、んん
っ、れろれろれろれろおおお〜〜〜♪」

イライザ「んっ……ぷはあっ……ふうっ。ああ、唾液でべとべとになってしもうた。やはり人間を舐めるのは、なんとも嗜虐心をそそのかう♪」

イライザ「どれどれ、では……んっ、左の耳も味わってやるとしようかのう」

イライザ「ふふふ、わかるぞお。お主も喜んでおるのだろう？ これでも幾人の冒険者を、この城に連れてきたゆえなあ。男の喜ぶことは手に取るようにわかるぞ」

イライザ「さあ、さあ、お主の耳、たっぷり舌でしゃぶりつくしてやるから……お主のちんぽ、はよういきり立たせるのじゃぞ……？」

イライザ「ゆくぞお〜？ あ〜むっ……はむっ……んぶっ、じゅぶる、れるう……れ〜ろ
おお……じゅるるる……」

イライザ「ふむふむ、こちらは塩気が少ない……ちいとばかり甘いかのう？ お主の汗の味かの……ふひひ♪」

イライザ「もっと舐めてみねばわからぬのう……んああええ、じゅろお、えろお……れる
うう……じゅぶ、あむ、じゅるう、じゅぶぶっ、れろお……」

イライザ「んっ、んじゅるう……あんっ……じゅろおお……んあああ、はあっ、んじゅる
う……れるうう……♪」

イライザ「ぷはあっ……んん〜♪ 良い顔じゃあ。もうわらわの耳舐めに夢中かのう？」

イライザ「よしよし、それでは……ラミアのとおきを見せてやろうかのう」

イライザ「よいか？ 今からわらわの、ながあ〜い舌を伸ばして、反対側の耳を舐めてやるからの？ ゆくぞお？」

イライザ「んああああああえええ〜〜〜……んんれええろろおおお〜〜〜〜」

イライザ「どうじゃあ？ わらわはラミアじゃから、こんなこともできるんじゃぞ？」

イライザ「このまま右耳を舐めてやろうかの……ふひひ」

イライザ「んんああっ……ああえええ……んはああああ〜〜〜〜」

イライザ「んんあっ……あんうっ……んんああっ……んんああっ……じゅる、んんんっ」

イライザ「んっ、あんっ……んんんんじゅるるるる〜〜……んんっ、んんむう、んふうう
〜〜〜」

イライザ「んんっ、んっ、ふはあぁっ。どうじゃったかのう？ ラミアの舌でしか味わえぬ感覚、堪能したかえ？」

イライザ「面白い技じゃが、結構、舌が疲れるんじゃよな、コレ。まあ、たまにはこうして使わぬと、長い舌がもったいない……」

イライザ「ん？ んん～？ くふふ、よしよし、お主よ、一丁前におちんぽを大きくさせておるなあ、よいぞぉ♪」

イライザ「そんなに陰茎を膨らませて……一体、何を期待しておるんじゃ？」

イライザ「ああ、ああ、わかっておるよ……今から、わらわがたぁっぷり楽しませてやるから、そう焦るでない」

イライザ「心配せずとも、ラミアの技でたっぷり搾り取ってやるゆえ、安心して身を任せるがよいぞ……ふふふふ♪」

3. フェラ ～唾液が止まらないべちゃべちゃフェラ～

イライザ「んん～、さてさて、次の愛撫をしてやりたいところなんじゃが……その前に、と……」

イライザ「んん～、たしか、この辺りに置いておいたような……おお、あったあった♪」

イライザ「ふふふ、この酒は、あれこれ試しているうちにたまたまできた酒でな」

イライザ「味のほうはさほどでもないが、薬草をたっぷり使ったせいかな、妙な効果がついてしまつてのう。まあ、飲んでみればわかる……」

イライザ「ああ、お主は勝手に飲むでないぞ？ 人間での実験はしておらぬから、どのような効果になるか想像もつかぬからなあ」

イライザ「ではでは早速いただくかの……んんっ、んぐっ、ごくっ……んむっ」

イライザ「おはあああ～……う～ん、自分で作っておいてなんじゃが、やっぱり味はイマイチじゃのう。お主の持ってきた酒のほうが好きじゃ♪」

イライザ「じゃあなんで飲んだのか……という顔じゃのう。もちろん、副作用のほうか……んっ、んむっ……そろそろ効果が出てきたかの？」

イライザ「ん、じゅぶ……じゅるう……おほおお♪ 出てきた、出てきた……じゅるう、れろお、わらわのドロドロした唾液が……」

イライザ「樹海でとれた薬草を使ったせいかな？ この酒を飲むと……じゅぶ……どろどろの唾液があふれて止まらなくなるのじゃ……くふふ♪」

イライザ「普段は使いようもないが、前戯ならばこれ以上ない効果じゃろ？ ふふふ、このたっぷりの唾液で、お主のちんぽを慰めてやるからのう♪」

イライザ「んんああええ……じゅるるろお……じゅぶ、れえええろお……じゅぶ、じゅるる、じゅぶぶ……」

イライザ「くふふ、唾液があふれて止まらぬわ……理想の酒を造りたくて、あれもこれもと試しておったら、いつしか変な酒ばかりできるようになってのう」

イライザ「ま、おかげでお主と楽しめるから、別に悪いことでもないがの……くふふ♪」

イライザ「では……わらわのたっぷりの唾液を……お主のちんぽに垂らしてえ……んああええ……るれえあああ……」

イライザ「ふふふ、たっぷり唾液をまぶしたから、ちんぽがてらてらと光っておるわ……こんなに勃起させて、期待しておるのか？」

イライザ「待っておれよ、今、わらわが期待通りの気持ちいいことをしてやるからの……
れろおお……んああええ……れろおお」

イライザ「ほうれ、わらわの長い舌が、ちんぽを這いまわって……じゅぶ、んんっ、じゅ
るるる、れろお、じゅろおお……」

イライザ「んんああ、えろおお……じゅぶ……れるう、んんああっ、はあっ、じゅぼお、
れるう……んんふふ、気持ちよいであろう？　ちんぽがビクビクと跳ねておる
ぞ？　んっ、じゅぶ、れるう」

イライザ「ちんぽの根元からかあ、先端まで……じゅろろろ、こうひてえ、舌を巻きつけ
てえ……じゅぶる……先っぽの下で、ちんぽの尿道を……ちろちろちろ～
……♪」

イライザ「すごいじゃろお～？　ちろ、ちろちろちろっ……じゅるう、れろおっ、んんは
っ、じゅぶ、じゅろお、れるれるれるれる～♪　んん～、じゅぶ、じゅぼお
っ」

イライザ「んんあっ、じゅぶ、じゅろお、じゅぶる、じゅるるるっ♪」

イライザ「ぷはあ♪　どうじゃ、わらわの舌技は？　なかなかのものであろう？　ふふ
ふ、お主のちんぽから、汁がこんなに零れておるぞ」

イライザ「んっ、じゅぶ、れるう……んん～♪　酒もよいが、ちんぽから漏れる汁も、こ
のエグみのある匂いがたまらぬのう……」

イライザ「なんとなくお主から酒の香りがするのは気のせいかな？　醸造所で働いてお
ると、そんな酒の匂いが移るんじゃないか？」

イライザ「すんすん……ふふふ、お主の匂い、嫌いではないぞ？」

イライザ「まだまだ、さらにすごい舌技で舐めとってやるからな？　わらわに極上の精液
を飲ませるのじゃぞ？　くふふ……」

イライザ「どれ、では……まずは舌を伸ばしてえ……んああええ、れろろおっおおお～
～んんっ♪」

イライザ「こうしてえ、わらわの舌を、ちんぽに巻きつけながらあ……喉奥まで、おちん
ぽ飲みこんでやるからの……んああええ、べろおおお～」

イライザ「んあっ、んごおっ、んおっ、おうっ……んんんう、じゅぶおっ、んごお、んお
おおお♪」

イライザ「んんあおうっ、んおおごっ、んんっ、んんじゅぶる、べろお、じゅぶっ、れろ
おお、んんじゅぶるるるるっ」

イライザ「んじゅぶぶる、ああ、んんっ、だめっ、よだれえ、じゅぶるる、たくさんあふ
れて……飲みこめないいつ、んんっ、じゅぶ、ずぞぞっ、ずろおおろ」

イライザ「んんあっ、じゅぶるっ、あ、すごっ、お主のお、おちんぽもお、びくびくしてるではないか……♪」

イライザ「いいぞお、このままあ、わらわの唾液たっぷりフェラでえ、濃い精液、ぜ〜んぶ吐き出してしまえ♪」

イライザ「わらわが喉奥でぜ〜んぶ受け止めてやるからのう……じゅぶ……じゅる、じゅぶぶっ、じゅぞぞぞぞっ」

イライザ「んんあっ、じゅぶる、じゅぞお、ずじゅるっ……ぷははあっ、んんっ、もう出しそうなのかの？ 腰が跳ねておるなあ」

イライザ「だ〜せっ、だ〜せっ、わらわにお主の精液、たっぷり飲ませておくれ……じゅるるっ、じゅぶっ、じゅぞ」

イライザ「んんっ、あんっ、じゅぼっ！ んおっ、んごおおっ、んじゅる、じゅぶぶぶっ、んんっ、んんっ！」

イライザ「んんああっ、来るな？ わかるぞ？ い〜っぱいわらわに飲ませるのじゃぞ……じゅるっ！ じゅぶぶぶっ！ んごごおお！」

イライザ「じゅぶぶぶっ、じゅろろろろっ！ じゅずずずっ！ んおおお！ んおっ！」

イライザ「んむっ！ ンんむっ!? んっ……ごくっ……じゅる、んぐっ、ごく、んんっ、んむっ……」

イライザ「んむ、ごくう……ぷはああっ。ふうう〜、んん、なんというのど越し……ふふふ、お主の精液、極上の味じゃなあ」

イライザ「なんとも苦いが、それでいて若々しい味がしたぞ。酒のアテにぴったりかもしれぬのう」

イライザ「おお、まだちんぽについておるな、もったいない……んじゅぶる、じゅぶ、れろお、じゅる、じゅるるる……」

イライザ「よしよし、キレイになったぞ、お主の精液の味、わらわも気に入ったゆえ、これからはどんどんわらわに飲ませるのじゃ……」

イライザ「んん？ なんじゃ？ 掃除してもらって、また勃起したのか？」

イライザ「くすくす、若いのう……よいぞよいぞ。わらわもまだまだ満足しておらぬからのう……」

イライザ「わらわの酒に、まだまだ付き合ってもらうから、覚悟せよ？ ふふふふ」

4. 性交 ～酒で火照った身体～

イライザ「んっ、んぐ、んぐ……ぷはぁぁ～～～っ。ふうっ……熱いのう……」

イライザ「やはり酒を飲むと身体が火照ってしまうわ……ひっく……」

イライザ「じゃが、まあ、このくらいの熱さが心地よい……寒いのは嫌いじゃからなあ。

ふうっ、お主もそう思わぬか？」

イライザ「なんじゃ、呆けた顔をしてえ……うい、んふふ、わらわがちんぽを舐めてやったのが、そんなに気持ちよかったのか？」

イライザ「じゃが、ぼけっとしておるヒマはないぞ？ もっと良いことをしてやろうというのだからなあ……」

イライザ「ほうれ、見えるか？ ラミアの下半身にある、この穴が……」

イライザ「ひっく……人間のそれとはずいぶん違うであろうが……なあに、性交の穴であることは変わらぬよ」

イライザ「くふふ、卵を産むのもこの穴じゃからな……ひだの一枚一枚、自分の意思でちゃんと動かして、卵を産むんじゃぞ♪」

イライザ「もちろんそんな穴じゃから、締めつけも抜群じゃ、気持ちよさそうじゃろ～？ くふふ……じゅる……過去にも、様々な男のちんぽを味見してきたからのう」

イライザ「んん？ 気が進まぬか？ おやおや……くふふ、口ではそうは言っても、お主のちんぽはやる気まんまんのようじゃがのう」

イライザ「どれ、お主のちんぽ、この穴でもしっかり味見してみようか」

イライザ「んはぁぁっ、あんっ……おおっ、これはなかなか……んんっ、よいではないか……あんっ、んはぁっ」

イライザ「んっ、はぁんっ……ふふ、すんなり奥まで、んんっ、入ってしまったのう……形も、いいぞお……ちんぽの先が、あんっ、良いところに当たるう」

イライザ「ぁぁっ、中で跳ねまわって……あんっ、そんなにわらわの中に挿入できたのが嬉しいのか？ ふふふ、本当にお主のちんぽは正直者じゃのう」

イライザ「んんぁっ、はぁんっ……ふふふ、火照りを冷ますつもりが……こんなに熱ういちんぽを入れてしまったら……ますます熱が増してしまうのう……」

イライザ「んっ、んぐっ、んぐっ……ぷはぁっ、ふひひ、よし、追加の酒もいれたことじゃし……早速動いてみるかのう」

イライザ「ぁっ、んぁっ、はぁっ……あんっ……んんぁっ、おっ、そこっ、んんっ、ぁぁんっ……は、はぁんっ」

イライザ「んんっ、んあっ、ほっ、んおっ、あんんっ、んあ、ああっ、はあんっ、ん
んんっ」

イライザ「んんっ、んふうっ……んん〜？ んっ、なんじゃ、お主、動き方がわからぬの
かあ？」

イライザ「くふふ、良い良い、気にするな……あんっ、お主に経験がないことくらいわか
っておる……あんっ、ああはあっ……」

イライザ「わらわがじっくり、たっぷり動いてやるから、ちんぽに集中するのじゃぞ……
あんっ、んっ、ふっ」

イライザ「よいか……ん、こうして、わらわが腰を前後左右に……んんっ、ううっ、くね
らせてえ、はあ、穴の中にい、ちんぽをよおくなじませるからのうっ……んん
っ」

イライザ「わらわのような長く生きたラミアでも、まぐわう時はデリケートじゃからな？
優しく扱うのじゃ、忘れるでないぞ……」

イライザ「んんっ、こうしてえ……こすりつけるように、円を描くように……んああっ、
ちんぽを、扱ってやるとお……んんっ、はあんっ」

イライザ「ああんっ……んはああっ！ ……くふふ、ほうれ、思った通りじゃ、ますます
硬くなってきたぞ？ お主のちんぽ♪」

イライザ「ああんっ、んあああっ、身体は小さいくせに、んんっ、ちんぽだけは立派じゃ
のう……よいよい、大きいのはあ、はあんっ、嫌いではないぞ……」

イライザ「そのままちんぽに集中しておけ、萎えさせるでないぞ……ふふふ、まあ、萎え
る暇など与えぬがのう……」

イライザ「ほうれ、わらわのおっぱいじゃぞ〜♪ んんっ、好きであろう？ 男でこれが
嫌いなものなどおらぬゆえな」

イライザ「んっ、ふっ……ふふ、触るか？ 揉むか？ それとも吸うか？ よいよい、わ
らわは寛大ゆえ、今だけは好きにさせてやろうぞ……」

イライザ「ああんっ……はあっ、んんっ、おやおや、いきなりそんなにむしゃぶりつきお
って……んんんっ、ふうっ……こうなればどのような男も赤子同然じゃのう
……」

イライザ「んあああんっ、おちんぽがあ、んんっ、ますます固く……んふうっ、まった
く、どれだけ胸が好きなんじゃ、仕方ないのお……」

イライザ「んんっ、んふっ、はあんっ……おちんぽが奥までえ、ごつごつ届くう……生意
気なおちんぽじゃの、まったくう……！」

イライザ「あんんっ、んんっ……わらわも、んっ、興が乗ってきたぞ……んんっ、あんっ」

イライザ「お前が悪いんじゃないからなあ……んんっ、美味しい酒と、具合のよいちんぽを持って、のこのこやってきおって……」

イライザ「たっぷり味わってやるから……覚悟するがよいぞ……んん？」

イライザ「んんんおっ、んおっ、おおんっ……おおっ、ほお……っ、んんひっ、んあっ、んんんんっ〜〜〜っ」

イライザ「ほれほれ、どうじゃあ……んんおっ、んっ、ラミアの女王の腰使いは……んんあっ、たまらぬじゃろう……このっ、ラミアならではの柔軟な動き……んっ」

イライザ「まあ、これをやるとお……わらわも声を抑えられぬが……のうっ……んんんっ、おおおっ、ほおおっ」

イライザ「ほれほれ、ああ、かわいいお口が開きっぱなしになっておるぞ……？」

イライザ「まったくしょうもないヤツじゃ……わらわがふさいでやろう、んんっ、じゅぶ、れる……じゅる、じゅぶ、じゅるるるっ」

イライザ「んんっ、じゅる、れる……じゅるる、じゅぶる……くふふ、良かったのう？ わらわと接吻できて？ これはとんでもない褒美じゃぞお」

イライザ「――は？ なんと？ 酒臭い？」

イライザ「ほ、ほっほお〜〜〜う？ なるほどなあ、そうかそうか、せっかくわらわが、あっつい接吻をしてやったのに、そういうことを言うのか」

イライザ「よくわかった。ならばこちらも本気を出そう」

イライザ「んんっ！ んおっ！ んあぁっ！ んんんっ！ んくひいっ！」

イライザ「ほれほれ！ どうじゃあっ！ 酒漬けのラミアが、本気を出すとどうなるか、その体に教え込んでやるぞ！」

イライザ「んんっ！ あんんっ！ あはあんっ！ んんんっ！ んお、ちんぽ気持ちいいっ、んんっ！ 良いとこ当たるう……んんあっ！」

イライザ「ほおおう♪ んおおっ、ちんぽが反応してきたぞおっ♪ わらわに犯されて喜んでしまっているのか？ よいよい、そのほうが都合がよいからのうう……っ♪」

イライザ「んおっ、んんあぁっ、くひいっ、んんあっ、ほおっ！ んんおおう♪ 奥うっ、お主のちんぽ、奥にグリグリくるぞ……んんんあっ」

イライザ「んんおっ、おおうっ、んんぐっっ」

イライザ「よい、よいぞぉ……んんっ、腹の奥が熱くなってきた……んはあぁっ♪ わらわもイキそうじゃ♪ んんっ、あんっ、ちゃんと、んほぉ♪ タイミングをあわせるんじゃぞ……っ」

イライザ「よいか、わらわが命じたらイクんじゃぞ……んんっ、あんっ、んおっ、そう、そのまま、んんっ、はあんっ、んんっ♪」

イライザ「あぁぁっ、いい、ちんぽイイツ、んんっ、んふっ、んあぁっ！ そうじゃ、そのまま固いちんぽで奥をかきまぜてえ……おっほぉ♪」

イライザ「あぁ、イク、イクぞ、んんっ、わらわがイッたらぁ、奥まで精液ぶちまけるんじゃぞ……よいな？ あんんっ、んんおおっ、そこっ、あ、ヤバ、イク、イクッ！」

イライザ「んおおおっ♪ あ、ダメ、くる、イク、イク、イクイクっ、イグウウうう～～～～～ッ！」

イライザ「んはあぁぁぁぁぁっ！ んおおおっ！ 奥まであつつい精液、ドロドロきたあぁっ、んんっ、あんっ、んおおおおっ！」

イライザ「んんくひいいっ、ちんぽ痙攣しておるううっ、んんんっ、んおお、はあぁ、んんんっ！ はああんっ……んっ！」

イライザ「はあっ……はあっ……んんあぁっ……はあ～～っ……」

イライザ「あぁ、イッた、イッたぁ……なんと元気なんじゃ、お主のちんぽは……味わうつもりが、すっかりイカされてしもうたわ……まったく、若いのう」

イライザ「くふふ……これは味見だけではもったいないわ……お主はわらわのそばにおいて、じっくりと味わうとしようかの……」

イライザ「これから酒のつまみとして、何度も味わってやるからのう、くふふふ……」

イライザ「わらわが命じたら、しっかりとちんぽをたたせるよう、準備をしておくのじゃぞ……♪」

5. 和らぎ水で休憩 ～氷や炭酸音を楽しみながら～

イライザ「んんっ……んんう……ういい～……ひっく……うあああ～」

イライザ「な、なんじゃあ、お主、そんな、酔っ払いを見るような眼をして……ふふ、確かに少し飲みすぎたがのう……」

イライザ「まあ、これくらいは普通、普通……」

イライザ「はっ、そういえばまだ、お主の持ってきた酒を飲んでおらんかったではないか！」

イライザ「せっかくそのためにお主を拉致……いやいや、助けたというのに、酒を飲まなかったら意味がないのう！」

イライザ「うむ、お主が持ってきた酒はここか、よしよし……」

イライザ「そうじゃ、アレがあったな。昔、人間から捧げられたお気に入りのグラスが……」

イライザ「くふふ、これはのう、純度の高いガラスに、金の装飾が施された、わらわの酒器の中でも、特にお気に入りの逸品なのじゃぞ」

イライザ「お主の運んでいた酒を、これで飲むとまた格別であろうなあ」

イライザ「いや、このままだとちと強いから……氷をいれて、と……」

イライザ「すごかろう。酒の研究に必要じゃったからな。いつでも魔法で冷やした氷を準備してあるのじゃ」

イライザ「樹海の奥でしか飲めぬ清水を、氷にしてあるぞ。くふふ、ここにいればいつでも冷えた飲み物が飲めるぞ、よかったのお？」

イライザ「よしよし、それではいよいよ、お主の持ってきたブドウ酒を、注いで～……」

イライザ「おお、このブドウ酒は微発砲なのじゃな、うむうむ、醸造のやりかたで炭酸が残るブドウ酒もある。これはこれでよいのう」

イライザ「あまり乱暴に注ぐと、せっかくの炭酸が抜けてしまうからのう。やさし～く、静かに……氷に当たらぬように注いでやるのがコツじゃ」

イライザ「んん～？ これくらいかあ～？ いや、もうちっとだけ、ええじゃろ」

イライザ「よお～し、よしよし、良い感じじゃ……ふふふ♪ よおし、これでもう三杯……いや、四杯目……まあ、ええか、何杯目でも！」

イライザ「んっ、んん、んんぐっ……っぷはああ～～～♪ やっぱり性交のあとの一杯は最高じゃのう……内臓にじっとりと染み渡るわ♪」

イライザ「んんっ、さてさて次は……うっ、うう、な、なんだかさっきから、お主の視線が冷たいように感じるのうう……気のせいかの……？」

イライザ「別に悪いことしておらぬじゃろう？ ひっく……うい～……ちょっと酒を飲んでおるだけではないか……」

イライザ「これくらい許してくれても——うう、なんだか軽蔑されておる気がする。いかんのう……これではわらわの威厳が……」

イライザ「わ、わかったわかった。少しは休むとしようではないか。ええっと、そこらに水差しがあったのう。酔ってるときに水を飲むのもまた極上じゃからな……」

イライザ「んっ、よしよし、水差しはこれじゃな。さっきも言うたが、これは樹海の奥でしかとれぬ特別な清水じゃ」

イライザ「酒の研究には、キレイな水もかかせぬからのう。いつでも用意してあるのじゃ。よし、では、水を注いで、と」

イライザ「うむ、よし、では飲むからな、んんっ、こくっ、こくっ、ごく……ふううう～～～♪ きっくううう～～～」

イライザ「はっ!? な、なんじゃその顔はっ。ちゃんとこれは水じゃぞ。いくらおいしそくに飲んでいても、酒ではないからな」

イライザ「そ、そうじゃっ、お主も飲むがよい。いま、わらわが注いでやろう。そうすれば酒ではないことがわかるじゃろ？ な？」

イライザ「ええっと、グラス、グラス……氷、氷……」

イライザ「ふふふ、わらわが手ずから入れてやったのじゃぞ、感謝するがよい」

イライザ「ほうれ、ちゃんと水じゃろ？ あれだけ激しい性交で疲れたじゃろうし、ちゃんと水分補給をしておくじゃぞ？」

イライザ「さ、ゆっくり飲むとよい。焦ってむせるでないぞ」

イライザ「うん、よしよし、言うことが聞けてえらいぞ。わらわは言うことを聞く弱い人間が大好きじゃからな……」

イライザ「二人でゆっくり休んだら、またわらわが、お主にたあっぷり、スケベなことをしてやるからのう……♪」

6. 絡み酒 ～全身を巻きつき、締めつけ～

イライザ「んんうっ、んんっ、ぷはああ～……ひっくっ♪」

イライザ「んあえ？ ええ？ 飲んでない。飲んでないぞ？ なにしろこれ、水……あ
っ」

イライザ「あ、あははは……いかんいかん、途中から間違えていたようじゃの。これ、唾
液がドロドロになる酒であったわ」

イライザ「い、いや、わざとではないぞ！ ひっく！ たまたま、たまたまじゃ……うう
っ、げっぶう♪ ひいっく」

イライザ「んん～、やっぱり飲みすぎかの？ すまんのう、わらわは一度飲むと止まらぬ
ゆえ……な？」

イライザ「んあっ……じゅぶ、じゅる……れるう……ああ、いかん、唾液が……んんっ、
あふれて止まらなくなってきたわ……じゅぶ、じゅるるる、じゅろろろお」

イライザ「じゅる……んんじゅる……れるう……んんん～♪ ふふ、せっかくじゃ、この
唾液で、また良いことをしてやろうか……」

イライザ「んんああえ～～～……じゅぶる……じゅろおおお……じゅるり………こうし
てえ、唾液を垂らしながらあ……ゆっくり……お主の周りを、回っていくとお
お……」

イライザ「んべろおおお～～～♪ ほうら、お主の身体があ、わらわの唾液でドロドロ
になってきたじゃろお？ んんっ、じゅるるう、れろお、べろおおお～～～
♪」

イライザ「んんんっ、唾液があ……わらわの下半身にも絡みついて……くふふ、お主の周
り、もうドロドロになってきたじゃろお？」

イライザ「これから、このたっぷりドロドロのラミアの身体で、お主に巻きついてやると
しようかのう」

イライザ「くふふ、大丈夫、怖くはないぞ？ わらわは力加減もちゃあんと心得ておるか
らのう。それに、ドロドロの唾液で、滑りもよくなっておるはずじゃ……」

イライザ「ちょっと変わったマッサージだとでも思えばよい……んああええええ……れ
ろお、んああえええ……」

イライザ「んんふふ、こうしてえ、ながあいわらわの下半身で、お主の周りをぐ～るぐ～る……ぐ～るぐ～る……回っていけばあ……ほうれ、いつの間にか、逃げられなくなっておるじゃろ……？」

イライザ「こうしてえ……ぐるぐると回って……すっかりわらわのながあ～い体に取り囲まれてしまったのう……もうどうやっても、ぬけだすことは叶わぬぞ～」

イライザ「ふむふむ……すっかりお主の周りで、わらわの下半身がとぐろを巻いておるぞ……」

イライザ「ふひひ、これからじいっくりと、お主の身体を締めつけてやろう……ほうれ、ほうれえ……」

イライザ「んんっ、んっ、んんっ～～？　ほうれ、これくらいかのう？　どうじゃ、痛くはないかのう？」

イライザ「痛かったらすぐに言うんじゃぞ～？　ふふ、加減はしておるゆえ、痛くはないはずじゃが……人間は、思ったよりも脆弱じゃからの……気をつけねば」

イライザ「んんっ～、ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅうっ……ふひひ、お主の体温で、わらわの身体もあったかくなってくるのお～♪」

イライザ「実はのう……言っておらなんだが、わらわは、人間に巻きつくのが……だあ～いすき♡　なのじゃ♡」

イライザ「この、骨と肉を締めつける感触と、人間の体温が伝わる感覚が……なんとも言えずたまらぬのう……ふひひひ♪」

イライザ「特に、酒を飲んで酔っ払うとのお……人間の感触が、どうしようもなく恋しくなって……絡みついてしまうわけじゃな……」

イライザ「これぞ本当の絡み酒……なんて、なあ♪　ふひっ、ふひひひ……」

イライザ「なんじゃ、その顔は。年寄りがしょうもない冗談を言った……みたいな顔をしおって」

イライザ「ま、確かに年寄りではあるが……ええい、そんな顔をされるのは気に食わぬのう……ひっくっ、酔っ払いでも、プライドがあるんじゃぞっ」

イライザ「こうしてくれるわっ。えいっ、えいっ」

イライザ「ほほほほ、女王をあざ笑った罰じゃよ♪」

イライザ「ちょっとだけ強くしてやったぞ……ふふ、まあ、これくらいであれば人間でも平気……ん？　あれ？　おや、おい、大丈夫か？」

イライザ「ああっ、いかんいかん、呼吸できておらぬか？ ヤバいやばい、ゆるめてゆるめて……」

イライザ「ふう、ふう、びっくりしたのう……これくらいで息が止まってしまうとは、人間という生き物は本当にもろいのお……」

イライザ「ああ、ああ、そんな顔をするな。なにもお主を殺したいわけではないのじゃ。死んでしまっただけは、この巻きつく感触も味わえんからの」

イライザ「死体に巻きついていても楽しくもなんともないわ」

イライザ「うんうん、これくらいが良いかのう……？ ほうれ、ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅううう～」

イライザ「ウロコの痕がちょっと残るくらいが、丁度いい塩梅じゃ……ほうれ、ほれ、ぶっといラミアの身体、感じておるかの～？」

イライザ「優しいラミアの女王が、囁きながらお主の身体を締め付けとるぞ……♪ こんなの滅多に味わえんから、しっかり堪能するんじゃぞ～？」

イライザ「くふふ……わかっておるぞ……ラミアに巻きつかれて、しっかり勃起しておるではないか……スケベな男じゃのう、まったく……♪」

イライザ「息が詰まるほど締め付けられても、ちんぽはしっかり喜んでおるんじゃなあ……ああ、よいよい、わらわも嬉しいぞ、こんなにちんぽが喜んでくれて……♪」

イライザ「ふふ、人間の身体、久方ぶりにじっくりと堪能できたわ……」

イライザ「じゃが、こうも身体をこすりつけておると、別の物も欲しくなってきたわのお……」

イライザ「その興奮したちんぽを、また、わらわの中にいれてくれるかのう？」

イライザ「わらわも酔いが回っておるゆえ、あまり優しくしてやれぬかもしれんが……簡単に壊れるでないぞ？ なあ、お主……？ ひっくっ、ういっ……」

7. 二回戦 ～酒で発情の巻き付きセックス～

イライザ「はーっ……はあーっ……ふしゅるるる……」

イライザ「はっ、いかんいかん、興奮しすぎてつい本能的に……いかなのう、酒を飲むと、つい野生がむきだしになってしまうわ」

イライザ「一応は、高貴なクイーンラミアであるからな。はしたないところは見せぬようにせねば、な」

イライザ「普段はそれなりに自制しておるし、むかし生贄にささげられた男たちとも、まあ……誰彼かまわずセックスするわけではなかったが……」

イライザ「……なんじゃその目は、信じておらぬのか？ そりゃあ、お主はささっと襲ってしまったがのう、むしろ例外なんじゃぞ」

イライザ「はあっ、はあっ……でもお、んんっ、はあ、セックスしたくて、たまらないのうう……」

イライザ「まずは景気づけに一杯……んんっ、んんっ、ごくっ……ぷはああ～、ひっく……よし、では始めるとしようかのう……」

イライザ「んんむっ、じゅぶ、じゅるっ、れる、んんっ……じゅる、れろおっ、んんはっ、はあっ、んあっ……！」

イライザ「ふふふ、昂ってついつい、舌を絡めてしまったのう……ほれ、もっと口を開けよ、舌を出せ……んんぶっ、じゅる、れろっ……」

イライザ「わらわのながあい舌で……お主の口の中……じゅぶ、じゅるっ……舌の根元から、歯の裏側まで、丁寧に……ねぶってやるぞ……じゅるり、じゅぶっ、れる、れろおっ……じゅるう、れるっ……はあっ」

イライザ「じゅぶる……れるっ……あんっ……んじゅる、はあっ、よいぞ、興奮してきたあっ、よいぞお、このまま、おちんぽ、わらわの中へ……っ」

イライザ「んんおおっ、い、一気に奥までえっ……」

イライザ「おおんっ……んひいっ、おお、なんという……まだまだ少年のくせに、さっきよりもちんぽが、たくましくなっておらぬかあ……？」

イライザ「ふっひひ、わらわと交尾して、精力が増してしまったのかの？ なんというスケベな男じゃ……んんっ、じゅぶ、れる、じゅるるる……」

イライザ「ま、そのくらいでないと、わらわの性欲は受け止められぬからのう。ふふふ、たっぷり楽しませてもらうぞ……♪」

イライザ「んんっ、おほっお……おお、んん、おちんぽが、奥までぞりぞりってえ……擦り上げてくるう……」

イライザ「ああんっ……んおっ、んあぁっ……あんんっ、二回目だからかのう……さっきよりも、感じてしまうう……んはっ、あぁっ、はあんっ……」

イライザ「んんっ、もっとお……密着して、ぎゅ～ってするのじゃ……んんっ、あんっ……はあんっ」

イライザ「くひひっ、んんっ、逃がさぬぞお……こうやってえ、お主の足に巻きつきながら……あんんっ、アソコを、こすりつけあって……んんあっ、おおっ、んおっ、おほっ……いい、なかなか、良いぞお……♪」

イライザ「ぎゅ～～～ってしながらのセックス、だあいすきじゃからな……もっともっと人肌を感じさせておくれ……」

イライザ「んんおっ、おうっ……んおおっ、おほおッ!? そ、そんなに嬉しかったのかのう……あんっ……んんあっ、おおっ、ああんっ……はあんっ……」

イライザ「んんあっ……んんあっ……焦るな焦るな……よいかあ、こうしてえ……じい～っくりと、円を描くように、腰を動かしてじゃなあ……」

イライザ「んんはあっ、あぁっ、あんんっ! んんんあ～っ……あぁあ～……そう、激しくせずに……優しく、優しくじゃぞお～……♪」

イライザ「わらわのことで感じて……あんんっ、総排泄孔……卵が出てくるところのお、ひだひだを、よお～くこねくり回すのじゃ……んんあぁ～……あぁっ、んんあぁ～……」

イライザ「あぁあんっ……いかなのう……これ、わらわのほう焦らされてしまうのう……いかにいかにっ、わらわは……どうにもこらえ性がないからのう」

イライザ「我慢したあとにやるのが気持ちよいのは……酒もセックスも同じじゃが……あ、これは耐えられるかのう……んんあぁっ、あんっ……んんん～～」

イライザ「あーいかな。これはいかな……ひとまず飲んで落ち着こうかの……んんっ、ぐび……ぐびっ……ぶっはあぁ～……♪」

イライザ「んあぁ? なんじゃあその顔はあ、セックス中に酒を飲む女は、好みではないのかあ?」

イライザ「こっちのほうが、動きが良くなるぞお～? ほうれ、ほうれ、ラミアならでは腰の動きで……んあっ、あんっ♪ くねるようにい、左右に動かしてえ……」

イライザ「くふふっ、どうじゃ、どうじゃ……おほお♪ お主の顔が気持ちよいと言っておるぞお～? ほうら、くね、くね……ぐーちゅ、ぐーちゅっ……♪」

イライザ「くふふっ♪ 良い顔じゃあ……酒の肴になるのう……んっ、んぐっ、んぶっ
……ぷっはああ〜♪」

イライザ「よしよし……では、酒もたっぷり飲んだことじゃし、そろそろ本気を出すとするかのう……」

イライザ「おぬしも気張って、ちゃあんとわらわの奥まで、そのちんぽでかき回すんじゃぞ〜？ 覚悟せい……くふふ♪」

イライザ「んんおおっ!? いきなり激しいのきたあっ！ んおっ、ほおおっ、んんっ、あんんんっ……！ んおっ、奥までえ……っ！」

イライザ「おおんっ……！ んほおっ……おおっ！ おひいいっ……！ 奥までえ、ごりゅごりゅっ、かき混ぜられるのお……！」

イライザ「おっ♪ んおっ♪ おほおお……おおっ！ これじゃあ、これこれっ、これくらいせんと満足できんのっ♪ おおっ、んのおおっ！ おおっ！」

イライザ「おおっ、勝手にいっ、尻尾が巻きついちゃうッ！ んんあっ、はあんっ！ おおっ、おひっ……んああっ！」

イライザ「んあああっ……ああっ、んっ！ 加減できんっ……ああんっ、んあっ、ダメッ、人間壊しちゃうかもお……んおおっ、ほおおっ」

イライザ「早くう、イけっ……イけっ、だせえっ。射精しないと、お主のほうが、んんっ、骨が折れるやも……くひいいいっ!?」

イライザ「おおおっ！ ダメっ、わらわのほうが先にイクっ!? んああっ、さっきまで焦らしまくってたからあっ！ んんあっ、おおおっ!?」

イライザ「んおおほおっ……んはあっ、ダメ、もうダメなのじゃあっ」

イライザ「だせえっ、精液たくさんっ、だすのじゃっ……精液だしてっ、わらわもたっぷりイカせるのじゃっ……んおっ、あんんっ！ んおああっ！」

イライザ「ああ〜〜〜っ！ んああっ、おほおおっ、イグっ、イグっ、あっ、イグのじゃっ、んんんあっ、んんあ、んんあああイグううううッ！」

イライザ「んおおおっ！ 精液きたっ、あつつい精液い、わらわの奥にっ、んおっ……おおおっ、んああっ……！」

イライザ「んあああっ……おおっ、ちんぽお、ビクビク跳ねてえ……くひっ、おおっ、んおああっ……」

イライザ「はあっ……はあっ……んああああっ……な、なんという量を出すのじゃ……おおっ、んんんっ、わらわの腹が精液でいっぱいではないか……んおっ……」

イライザ「やれやれ、興が乗りすぎたの……まあ、これでひとまずは満足——」

イライザ「んっほおお!? おおっ! お主っ……まだ満足できぬのかっ!？」

イライザ「くひいっ、ダメっ、イッたばかりで敏感だからぁ……おおっ、んおっ、ほおおっ!？」

イライザ「はぁんんっ、んぁあっ、ダメ、ダメじゃっ、またイグっ、連続射精ちんぽでまたイカされるっ! んんぁっ! ほおおっ!? んんぁあっ!」

イライザ「んはぁあっ、イグ、イグイグイグイグううう———ッ!」

イライザ「くひいいいっ、さっきよりも精液でてるのおっ……んんほおおっ」

イライザ「酔っぱらいの性器イカされるう……んんぁっ、はあんっ……ほおおっ、んおおっおっ」

イライザ「んおおおっ……痙攣止まらぬ……んんんっ、はあんっ……んぁぁぁ〜……!」

イライザ「はぁぁ……はぁっ……ど、どれだけ出すんじゃ、馬鹿者めっ、酒の匂いで、お主も興奮したのかのう……?」

イライザ「ああ、もう……なんというちんぽに育ってしまったのじゃ、これではわらわが性欲を受け止めるほうではないか……」

イライザ「まあ、とっておきの給仕が手に入ったと思って、喜ぶとするかの……くふっ、くふふっ」

イライザ「はぁっ……とはいえ、さすがのわらわも、もう、飲めぬ……ういっ、ひっく……」

8. 【ルート分岐】質問 ～放蕩か女王の生贄か～

イライザ「ふう、ふう……さすがに酔いが回ってきたのう……あれだけ飲んだうえに、激しくセックスもすれば当然かもしれぬが……」

イライザ「うう、気のせいか視線が痛いのか……し、仕方ないじゃろ、クイーンラミアなどと名乗ってはおっても、わらわは独りぼっち、ここで暮らしておるんじゃないか……」

イライザ「趣味の酒作りと、冒険者から酒をわけてもらうのが、唯一の楽しみ……う、うう、ううう～……ぐすっ」

イライザ「ううっ……たまたま不老長寿の酒ができたので、長生きはしておるが……昔からの家臣はみな死んでしましたし……」

イライザ「樹海のボス扱いで、同族のラミアもここには寄り付かん……たまぁに酒をもってふらふら来る、お主のような冒険者を構うしかないのじゃあ。ふえええん」

イライザ「あーっ！ また面倒そうな顔をしたな！ どうせわらわは、面倒で泣き上戸のラミアじゃよ！ ふんだ！」

イライザ「うう、うぐっ……ひっぐ……お主がいなくなると、またわらわは独りぼっちなのじゃあ……」

イライザ「せっかくの客人じゃから、ぜえったい、帰さぬぞお。覚悟せえよ……うう、ぐす、ぐすっ……」

イライザ「お主も酒を運んでいたのじゃから、酒作りの知識もあるじゃろ？ な、ここでわらわの酒作りを手伝ってくれぬか？」

イライザ「はっ……そうじゃ、それがよい。二人でここで過ごして、酒を飲んで、セックスしまくるのじゃ……おお、きっと楽しいぞお」

イライザ「ふふふ、良いではないか。今までと違う味わいの酒も作れそうじゃ……」

イライザ「んん？ ……気のせいかの？ なんとなしに、それも不満だと言いたげな顔をしておるのう」

イライザ「ああ、そういえば聞いたことがある。最近は……ラミアに丸呑みにされたい冒険者が樹海にやってくるとかなんとか。もしやお主、そんな趣味があるのか？」

イライザ「ほほう……なんと、そういう趣味があるなら、わらわが酒のつまみとして、お主を腹に収めてやってもいいぞ」

イライザ「女王の贅となるのじゃ、古代だと名誉なことであるぞ。まあ、今はどうか知らぬがのう……ほほほ♪」

イライザ「まあ、わらわはどちらでもよいがの……お主と酒作りをするのでも、お主を喰らうて無聊を慰めるのでも……」

イライザ「さ、好きな方を選ぶがよい。きちんと聞いてやろう」

イライザ「わらわは寛大なラミアじゃから、ちゃ〜んと、お主の望みをかなえてやるからのう……ほほほほ♪」

9 a. 【隷属ルート】ワイン風呂セックス ～激しい従者～

イライザ「ふうう～……風呂は良いのう、どうじゃあ、お主、風呂につかるなど、冒険者の身分ではなかなかできるものではあるまい」

イライザ「しかし驚いたぞ。失敗作のブドウ酒を、こうして浴場に再利用するとはのう……」

イライザ「お主の街でも、こんな道楽ができる身分は限られておるじゃろうに。まあ、わらわは高貴な身分ゆえ、存分に味わうがのう」

イライザ「おぬしも肩までゆっくり使って、ブドウ酒の心地よさを味わうがよい」

イライザ「いやあ～、それにしても、わらわの考えは大当たりであったなあ」

イライザ「おぬしを従者にしてから、酒作りがはかどるし、こうしてわらわの知らぬアイデアまで出してくれるんじゃからなあ」

イライザ「二人ぼっち、廃城で暮らすのも、幸せであろう？ なにしろ、高貴なわらわに仕えておるんじゃからなあ」

イライザ「んんっ、んんぐ……ぷはあ……それに、ワイン風呂でブドウ酒を飲むのも、なんとも言えず贅沢じゃのう……ほほほ♪」

イライザ「んん～？ おやあ……？」

イライザ「お主い、わらわと一緒に入浴しているからといって……くふふ、ちんぽを元気にさせておるではないかあ」

イライザ「よいよい、仕方あるまいよ。わらわの身体を見て、欲情せぬものなどおるはずもないからのう♪」

イライザ「しかたない。ブドウ酒は味わったことじゃし、今度はお主のことを味わうとしようかのう」

イライザ「ほうれ、腰をあげよ……湯船にそのいきり立ったちんぽを出してみせるがよい」

イライザ「おうおう、元気なちんぽじゃのう。よしよし、今慰めてやるからのう あ～むっ、んむ、じゅぶ……れろお……んあ、じゅぶぶぶ」

イライザ「じゅるるっ、れるっ、あんっ……ふふ、ワイン風呂に使っていたおかげで……お主の体から、ほのかに酒の匂いがしておるぞ……すんすん」

イライザ「んんん～、ちんぽと酒の香りを同時に味わえて……なんという贅沢じゃ……♪」

イライザ「それにワイン風呂の効果で血の巡りがよくなって……ちんぽがさらにバッキバキになっておるのう。くふふ、これは、期待できそうじゃの……」

イライザ「んじゅる……じゅぶ……れろお……んんじゅぶっ、じゅる……ぶっはあ♪」

イライザ「おっと、まだ出すでないぞ。わらわの中にも、ちゃーんとちんぽ挿いれても
らわなくてはならぬからの」

イライザ「くふふ、ようし、お主のちんぽも準備万端のようじゃし……」

イライザ「わらわももう、我慢が効かぬからのう。お主からしっかり、精液搾り取ってやるぞ？」

イライザ「ああんっ……んふうう……んっ、ちんぽ来たあ……ワインと一緒にい、中まで
ずっぷり入ってくるう……」

イライザ「んんあんっ……あんっ、んんっ……はあっ……よい、よいぞ、わらわの従者
兼、セックス奴隷として、ちゃーんと成長しておるようで……嬉しいのう」

イライザ「はあんっ……んっ、ちゃんと腰を動かして、わらわを楽しませるんじゃぞ……
くふふ」

イライザ「んおおっ……あんっ……んあぁっ、ああ、いいっ、んんっ、気持ちイイ……ん
んあっ……はあんっ……！」

イライザ「ああ、いい、すごい、コレ、ハマるう……んんっ、お酒よりも好きになってし
まうかものう……っ」

イライザ「んんあっ、んっ、わらわがあ、セックス中毒になったらあ、ちゃーんと責任を
とるんじゃぞ……んふふふ♪」

イライザ「ああんんっ♪ んあぁっ、おっほお……♪ んお、んんっ、あんっ……んくひ
いいっ、おうっ……」

イライザ「このう……んんっ♪ ちんぽが暴れておるぞ……すっかり元気になりおって
……わらわに頼りにされるのが、そんなに嬉しいのか？」

イライザ「しょうもないヤツじゃ……あんっんんあっ……これからもわらわのセックス奴
隷として、しっかり励むのじゃぞ……おおっ♪ んおおっ♪」

イライザ「そうそう、そこお……んおおう、おうっ……あんっ……んんはっ、あぁっ、ん
んっ、くひっ、あんっ、おう……っ！」

イライザ「くひひっ、もっともっとちんぽ煽ってやろうか……どれ、このように……」

イライザ「んんあ……あんっ……ほれ、わらわの命令じゃぞ……あんっ……もっもっ
と、おちんぽ固くさせよ……」

イライザ「ああんっ……んん、わらわは、かったあ〜いおちんぽで、激しく、ぐちゅぐ
ちゅって、奥まで突かれるのが好きじゃ♪ ほうれ、がんばれ、がんばれ♪」

イライザ「わらわのお……はあんっ……口も、おっぱいも、アソコも、どこも好きに使っ
てよいからあ……んっ、顔に似合わぬ男らしいセックスを見せてみよ……」

イライザ「あんっ、おちんぽ跳ねたあ……♪ よいではないかあ、つよ〜いセックス、わ
らわに味あわせてみせよ……」

イライザ「ンほおッ!? おうっ……んおっ、はげしっ……あんっ……んはあっ、あんっ
……! んんっ、んおおっ……おおっ!」

イライザ「んああっ、おうっ、手加減なしの本気セックスう……おうっ、はあんっ……
んんあっ、やばっ……んんんっ、これヤバすぎなのじゃ……」

イライザ「んんっ、やはりワイン風呂の効能かのう? いつもより興奮して……んんっ、
んんっ、あんっ、野蛮な獣のように、んんっ、ちんぽ出し入れされるう
……!」

イライザ「んんおおっ! おほおっ、女王なのにい、はしたない声でちゃうう、あんっ、
んんっ、おおおっ、んおおおっ」

イライザ「なんという生意気なちんぽじゃ、これは反逆罪じゃのう……♪ んんっ、たっ
ぷりわらわの中に、精液出すまで許してやらぬぞ……あんっ! んんあっ、は
あっ!」

イライザ「んんっ、おひっ……んおっ、おおうっ! はあっんっ、あんっ……んんあっ
……はあんっ!」

イライザ「はあっ、はあっ、んんっ、あ、ダメ、んんんっ、いきそう、いきそうなのじゃ
……んんっ、あんっ」

イライザ「お主はどうじゃ……精液だせるかの? んんっ、あんっ、たっぷりわらわの中
にぶちまけるんじゃぞ?」

イライザ「射精でちんぽビクビクさせてえ、そのままわらわをイカせるんじゃ……んん
っ、わかったな? くふふ……♪」

イライザ「あっ、イクっ、くる、おっきいの来るのじゃ……あっ、イグ、イグっ…んんあ
っ、はんっ、んんっ、んああああっ、イグ、イグううううっ!」

イライザ「んおおおっ! おうっ、熱い精液い、たっぷり流れ込んで……んおおお、お
うっ、んんっ」

イライザ「ああっ、中でちんぽが暴れておるっ、んんっ……あんっ、ああっ、んんあっ、くひいいっ……！」

イライザ「んあっ……はあっ、ああ〜っ、んんっ、おうっ、尻尾が震えて……あんんっ、まったく、どんだけ出すのじゃ、お主はあ……」

イライザ「ん〜？ なんじゃ、まだまだ物足りなさそうじゃなあ？」

イライザ「たっぷり出したと言うのに……まだまだちんぽも硬いまま……くふふ、よいよい、セックス奴隷としてやる気があるのは良いことじゃ」

イライザ「ほうれ、わらわが最後の一滴までしぼりにとってやるゆえ……もう一回射精するがっ、んんっ、よいぞお……」

イライザ「ああんっ！ はあっ！ ほおおっ、んおっ、おほおっ！ んあっ、どうじゃ、わらわの動きはっ、んんんっ、あんっ！」

イライザ「ああ、ちんぽ膨らんできたあっ！ 絶倫ちんぽすごっ……！ んおっ、あんっ、おっほおお！」

イライザ「いいぞお、だせ、だせ……んんああっあっ、私もイグっ、イグからあっ！ んんっ、あんんんっ！ あああ、んっ、はあんっ！」

イライザ「あーイグっ、イグっ、イクイクイクイクイグうう————ッ！」

イライザ「んっほおおおっ!? 最大アクメきたあっ！ んんああああっ————ッ！」

イライザ「ああっ……はああんっ……んんっ……あああ〜〜〜ッ……すご……おお、んほおおっ……」

イライザ「あっ、精液まだ出てるう……ほおおっ、んおっ……たっぷり精液で、甘イキするのじゃあ……んんんっ」

イライザ「んんっ……はあっ……ちょ、ちょっと激しすぎたが……あんっ、わらわは満足であるぞ……ご苦労であったなあ……」

イライザ「これからも、わらわが命じたら、ちゃんとちんぽたたせて、たっぷり精液をささげるのじゃぞ……良いな？」

イライザ「ふう……風呂で激しくセックスしたら、ノドが乾いたのう……」

イライザ「くふふ、では飲み直すとするかのう……酒を持ってくるがよい」

イライザ「お主が酌をすると、それだけで酒が美味くなるゆえ、わらわの退屈も慰められておる……」

イライザ「お主は優秀な給仕で、セックス奴隷じゃからな……決してこの城から逃がさぬぞ……くふっ、くふふふふっ♪」

9b. 【丸呑みルート】女王の生贄 ～酒と人間は相性最高～

イライザ「んん、なんと……そうかそうか、わらわの贄になりたいと申すか」

イライザ「久方ぶりの来訪者だというのに、もったいないのう。じゃが、昔はよく、酒のつまみに、捧げられた人間を喰っておったし……」

イライザ「自ら進んで贄になりたいというその忠誠、受け取らぬわけにもいくまいよ、どれ……」

イライザ「たしかこのあたりに——おお、あったあった」

イライザ「よしよし、このくらいで良いかのう……」

イライザ「これは酒を造る過程でできた副産物でのう。まあ、人間のお主には麻薬のようなものじゃ」

イライザ「さすがに苦痛の悲鳴を聞きながら、酒を飲む趣味はないのでな。お主が苦しまずに丸呑みされるよう、今から口移しで飲ませてやろう」

イライザ「んんっ、んんぐ、んむっ……」

イライザ「……んんっ、んぶ……じゅぶ、れろっ……じゅぶる……じゅぶる……じゅる……ぷはっ……」

イライザ「んん？　ちゃ～んと飲めたかの？　よしよし、しっかり飲んだな。もう目が虚ろになっておるぞ、きひひ」

イライザ「では……まずはお主の身体を食べやすくするために、全身の骨をくだいてやるからのう」

イライザ「こうしてぐるり、ぐるりと、お主の身体にまきついていって……」

イライザ「うんうん、このくらいかのう、しっかり巻きついたぞ……」

イライザ「やめるなら今のうちじゃぞ？　聞いておるか？　……ああ、もうすっかり薬が回って、聞こえておらんなあ」

イライザ「じゃあ、遠慮なく、全身の骨を砕いてから、丸呑みさせてもらおうとするかのう♪」

イライザ「ほうれ、お主の足から、順番に骨を砕いておるぞ……ぼきっ、ぼきっ、ぼきり……とな……聞こえるかあ？」

イライザ「そうれ、これは右足じゃろ？ ぼき、ぼきっ、とな。次は左足じゃ。んっ、んむっ……うん、しっかり砕けたのう」

イライザ「もうお主は逃げ出せぬのう。まあ、もはや逃げる意思もなかろうが……ほれ、次は腕じゃな。指から、前腕、上腕まで……ぼき、ぼきり、ぼきり、と♪」

イライザ「仕上げはのう、背骨じゃ……んっ、これは力加減が難しくてのう。ちょっと場所が悪いと、背骨を折っただけでポックリ死んでしまうのじゃ……」

イライザ「死体を丸呑みしても美味しくないからの……お主はちょうどいい塩梅で、生きたまま丸呑みできるくらいになってもらわぬとな」

イライザ「そうれ、背骨を折るぞお……ポッキリ、と♪ よしよし、呼吸しておるな、いい具合じゃあ」

イライザ「それでは……んっ、これからわらわの顎を外して、お主を頭から丸呑みするから、覚悟するがよい」

イライザ「おっとと、忘れるとこじゃった。まずはあ、とびきりのお気に入りの酒を、飲んでから、と……」

イライザ「んんっ、んぐっ……んむっ、ぷっはああああ～～♪ んっ、やはり気に入った酒は美味しいのう」

イライザ「この酒のあとに、人間を丸呑みにする喉ごしがたまらんのじゃあ。よいか？ では、いくぞお」

イライザ「いっただきまあ～す♪」

イライザ「んっ、んんごおっ！ んおっ……んんんむっ、んぐうっ、んおっ……んんんっ、んごごごおおお～～～っ♪」

イライザ「んんぐ、んぐっ……んおっ、んごおおっ、おうっ、んぶ、んごっ、おう、んんむうううっ」

イライザ「んんんごおっ、んおっ……ぶっはあっ、げっぶううう～～～♪ おおおっ、おふっ、久しぶりの丸呑みじゃああ」

イライザ「くふふ、人間一人を丸呑みは、やはり少々きついものう。げっぶう……まあ、お主はもうわらわの腹の中じゃから、ゆっくり溶かされるがよい……」

イライザ「消化まで3日、といったところかのう。それまでわらわの腹の中で、じいっくり、わらわの晩酌に付き合っておくれ？」

イライザ「ほうれ、酒を飲むぞ……んんぐっ、んぐっ、んおっ、ぶっはああっ♪」

イライザ「ほほほ、人間と共に楽しむ酒も極上じゃあ♪ ああ、胃の中にかかってしまったかのう。まあ、お主ももう食べ物じゃから、遠慮せずに酒を浴びるがよい♪」

イライザ「んっ、んむっ、んむっ♪」

イライザ「だあいじょーぶ、大事な大事な酒のつまみじゃ……すぐには消化せんよ……」

イライザ「酒と一緒に、時間をかけて、しっかり味わって……最後にはわらわの体の一部になってもらうからの♪」

イライザ「酒も、酒のつまみも大好きじゃ……腹の中に入っても、お主のことを好ましく思っておるぞ……ほほほほ」

イライザ「じゃから、なにも考えず、わらわの晩酌に付き合っておくれ……くふっ、くふ、くふふふ♪」

イライザ「んっ、んぐっ、ごくっ……ぶっはあああ～～～♪」

(END)